

1 アセスメントの理論と実践

山田 礼子
(同志社大学)

1. 学生の発達研究の理論的検討

平成 16 年に着手した本研究では、転換期の大学における学生の教育評価を、学習成果の達成にのみ焦点化するのではなく、現在の学生の家庭環境、経てきた学習背景、若者文化等が及ぼす影響を解明し、その上で大学での学習における学習意欲、動機づけ、学習態度や習慣などの情緒的な要因を向上させることにつながる教育評価の開発をおこなうことに主眼をおいた。学生の情緒的側面の成長を企図した教育評価の開発にあたり、学生研究の第一人者であるアメリカのカレッジ・インパクト理論とそれを具現化した I-E-O モデルに依拠した。そこで本節でカレッジ・インパクト理論と本理論のベース理論として大きく影響を与えてきた学生の発達研究について検討してみることにしたい。学生の発達研究の蓄積が主に行われてきているのはアメリカにおいてであることから、本節ではアメリカにおいて学生の発達研究のベースとなってきた理論に関する先行研究を心理学および社会的アプローチ両方から検討してみることにする。その際、本稿でのキーワードとなる概念が大学という環境のなかでの学生の発達と変化であることから、発達と変容を定義しておきたい。発達とは、ペリー（1970）によると望ましい心理的、教育的、モラル上での目的を価値づけるあるいは求める方向性への成熟や成長を意味している。変容は発達とは対照的に学生の認知的技能、情緒的特性、態度、価値、行動といった諸側面が時間軸でどれだけ量的、質的は変化を意味しており、後退あるいは進展といった方向性を包含した用語ではないとされている¹。本稿でもこの定義に基づいて変容を捉えることにしたい。パスカレラはアメリカにおける学生の変容に関する研究の系譜は主に心理学に基づいた発達理論と社会学をベースとしたカレッジ・インパクト理論に分類できるとしている。本節ではパスカレラの分類に従い、おもな先行研究の概要を紹介してみよう。

学生の変容に関する発達理論学者のなかで最も影響を及ぼしてきている理論はチカリングが明らかにした発達に向けての 7 つのベクトルである²。学生の発達に向く 7 つのベクトルはそれぞれ、能力の達成、情動の統制、依存から自立へ、対人関係の成熟、アイデンティティの確立、目標の開発、統合性の発達である。チカリングは知識と実践をバランスよく統合させることこれらの 7 つのベクトルを有効化する基本であるとみなし、その主張をベースに 1993 年にはチカリングとレイザーは大学の役割が 7 つのベクトルに果たす重要性を指摘している³。チカリングの理論は社会心理学の系譜の上では最

も大学生の発達研究に影響を及ぼしたという評価は高い。また、エリクソンに代表されるアイデンティティ理論も発達理論のなかでは大学生の発達研究に根強く影響を与えてきた理論である。一方、社会心理系理論が発達の方向性、アイデンティティ状況に着目するのに対し、ピアジェに始まる理論の系統に根ざした認知構造理論は変化の性質と過程に着目している。大学生の発達を論じる上で、看過できない理論としては主にペリーの知的および倫理的発達理論、キングとキッチンナーの反省的判断モデル、バクスターの認知的反省モデル、コールバークの道徳性発達理論、ギリガンの女性の道徳性発達モデルなどが挙げられるが、認知構造論者が提示するモデルの共通性は、いずれも発達過程のなかで個人が通過する一連の段階を提示している点にある。発達に関連した他の理論としては、学生の個人差をもとに分類した典型的モデルや人と環境の相互作用理論とそのモデル化がある。これら発達に関連した理論の共通性は、こうした理論を構成している要素および発達過程の類似性ということに収斂される⁴。

発達理論に対する主な批判は、社会学的アプローチを採用している論者からの学生の発達の段階が後退するという段階を勘案せず前向きに捉え過ぎているという点と学生の大学生活を通じての経験の軽視という点に集中する。その代表的論者であるフェルドマンやダニファは社会的制度として機能している大学を前提として、大学という環境の中での学生の社会化過程を検討する必要性を論じている。このようなアプローチに共通のモデルを表わすキーワードがカレッジ・インパクトである⁵。

代表的なカレッジ・インパクトモデル論者であり、社会的エージェントとしての大学の効果に注目してその過程を理論化したのがアスティンである。アスティンは30年以上にもわたって大学新生を対象としたアセスメント(CIRP)、上級生用のアセスメント(CSS)を実施してきた。一連のアセスメントを開発するに当たって、アスティンが根拠とした理論的背景がI-E-0(既得情報、環境、成果)モデルである。

このモデルは図1.1.1に示しているように、非常に単純であるがアセスメントにともなう複雑な問題に対処するには効果的であるという評価を受けている。アウトカムは成果、具体的には学生の成績や学習成果、学位取得に相当する。インプットは学生の既得情報と言い換えられ、環境は学生が教育課程のなかで経験することとまとめられる。I-E-0モデルにおける相互の変数とアセスメントの関連性を考えた場合、通常大学におけるアセスメントは環境と成果の関連性に集中されることが多い。具体的には、教育課程等の影響がいかなる成果を導き出しているかというように捉えられる傾向が強い。しかし、実際には学生の成果には環境要因だけでなく学生個々の資質や背景などが影響を及ぼしていることは明らかである。下記の矢印が示しているように、学生個々の差異が直接成果に関係している場合と学生個々の差異があるにせよ、環境を経て成果につながるというケースの2通りが考えられる。

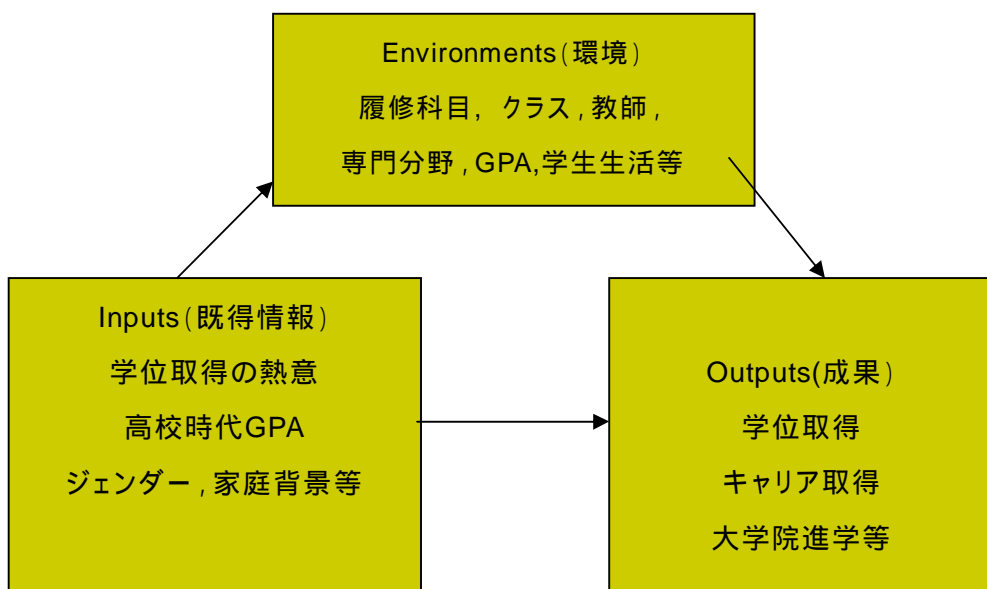


図 1.1.1 アスティンの I-E-O モデル⁶

学生の既得情報が本モデルにおいて不可欠である理由としては、成果が単に環境要因であると結論づけることなく、従前の背景がどれくらい成果に関連性があるかということ进行分析することで、環境要因のより正確なプラスおよびマイナス効果が測定できることにある。

それでは具体的に I-E-O モデルのアウトプット（成果）、インプット（既得情報）、そして環境をどのように測定するのだろうか。学生の成果は知識の習得や知識を使って理論付けや論理構成などができるという認知面（cognitive）と感情、態度、価値観、信念、自己概念、期待感や社会的および人的相互関係の構築に関連するような情緒面（affective、もしくは non-cognitive）に分類できると認識されている。

こうした 2 つの側面に基づく成果は、図 1.1.2 のように学生の内的面である心理的側面と実際に態度あるいは行動にあらわれる行動面に分類できる。アセスメントを実施する際に失念してはならない要素としていつの時点でその成果を測定するかということがある。成果を測定する場合、大学時代に成果が明確に現れると簡単であるが、実際には大学卒業後に大学時代の環境的要因が効果となって現れることもしばしば起こる。それゆえ、大学在学中におこなう短期的なサイクルでのアセスメントと卒業後に実施される長期的なサイクルを視野にいれたアセスメントという 2 種類が不可欠であることも考慮しておかねばならない。

	認知面	情緒面
内面的	教科・領域別知識 学習能力 批判的思考力 基礎学習技術 特殊技能 学習達成度	価値 関心 自己概念 態度 信念 大学満足度
行動的	学位取得 キャリア取得 賞獲得	リーダーシップ 市民性 人間関係 趣味

図 1.1.2 学生の教育成果についての分類⁷

次に環境要因や成果と不可欠である I について検討してみる。アスティンは学生の Input（既得情報）部分を測定するアセスメントとして CIRP(Cooperative Institutional Research Program)を 1966 年に開発し、大学の新生に継続して実施してきている。CIRP によって得られる学生の情報をベースにして、大学は新生の情報の入手、学生募集戦略、カリキュラムの検討、教育課程やその他のプログラム立案や評価を実施し、そして得られた分析結果は公的な情報として外部に公表される。

アスティンはペースとの共同で、この I-E-O モデルの枠組みで設計されたアセスメントの研究結果を蓄積することにより、学生の発達や変化を説明する概念、すなわち学生は関与(involverment)によって学ぶという関与理論を提示した⁸。アスティンの I-E-O モデルおよび関与理論はそれぞれの変数間の具体的な関係性を理論として裏付ける上での不備と具体的事例の記述でしかないという批判もされているが、大学の社会的エージェントとしてのインパクトへの視座を提示し、その基本を提示したことへの評価は高く、その後数多く提示されてきているカレッジ・インパクトモデルの原点はアスティンのモデルを基本として発展されていることは疑いがないといえよう。

ティントは退学を選択した学生の退学に到るまでの過程に焦点をあて、カレッジ・インパクトモデルをより明確に、かつ長期的に、そして変数間の相互関連性を具体的に示した点で評価されている。このモデルのなかでティントはアスティンの関与理論を発展させて、学問上および社会上の経験を統合する過程を通じて学生が目標へと向かう過程を明らかにしている。具体的には、多様な家庭、学習経験、成績(input 情報)、大学での学習目標、将来の目標像などを持った学生が入学するが、エージェントとしての大学での経験を通じて学問上および社会上の経験を統合することにより、その経験は目標へと結びつくことが可能となるが、退学学生はこの統合を成功させることが出来なかった学生であるという見方である。ティントの提示したモデルは大学という環境での学生の経験、他の要素との関与を既得情報と関連づけるという大学の内部での関係性を明らかにしたが、一方で大学の

構造的特徴や環境の因果関係および個々の学生の努力といった点での効果は解明されていない⁹。

既得情報（学生の背景）、大学の組織的特性、社会化エージェントとしての大学の内部機能、大学内の環境に学生個々の努力の質という変数を加えて、成果を見るというモデルを提示したのがパスカレラである。エージェントとしての大学制度や組織の影響および学生の努力の質を説明することに適していないという批判に対応すべく、発展してきた一連のカレッジ・インパクトモデルは、現在でもさらに研究の蓄積をつみながら改善されている。カレッジ・インパクトモデルの共通性としては性別、人種、民族性などの属性、アスティンの I-E-O モデルのインプット部分に相当する部分を重要な変数と捉え、制度構造、政策、教育課程などの環境要因を重要な要素として捉えるところにある¹⁰。

海外でのカレッジ・インパクト研究の代表的な文献として以下が挙げられる。

Astin, A.W. (1993). *Assessment for Excellence: The Philosophy and Practice of Assessment and Evaluation in Higher Education*, Phoenix: Arizona, ORYX Press.

Astin, H. S., Antonio, A. L. (2004). "The Impact of College on Character Development", *New Directions for Institutional Research*, No. 122. pp.55-64.

Banta, T. W., and Associates.(2002). *Building a Scholarship of Assessment*, San Francisco, Calif.: Jossey-Bass. A Wiley Company.

Kuh, G. D., Umbach, P. D. (2004). "College and Character: Insights from the National Survey of Student Engagement", *New Directions for Institutional Research*, No. 122. pp.37-54.

Pascarella, E.T., Terenzini, P.T. (2005). *How College Affects Students*. San Francisco: Jossey-Bass.

2 . 日本における学生研究の検討

日本においても決して学生研究が看過されてきた訳ではなく、カレッジ・インパクトに関する研究も蓄積されてきた。しかしながら、その研究は主にアスティンの理論に関する文献研究に収斂されていることが大きな特徴である。日本でのカレッジ・インパクト研究の第一人者である丸山は、大学生の学習意欲、学習態度、さらに職業アスピレーションが大学時代にどのように形成されてきたかを検討してきた。その際、丸山はマイヤーが提示してきたチャーター、すなわち個々の大学に対して社会が付与した「免許」という概念を用い、これらが日本の大学においてはカレッジ・インパクトよりも大きな効果を持つと論じている。チャーターを構成する要素は 過去の卒業生が示してきた卒業後の進路、職業的地位、 卒業生の進路について社会一般の人が持っている印象、信念、 ある大学の卒業生は特定の職業についても当然であるという正当性という3つからであるが、丸山の実

証研究ではチャーターを測定する指標として日本の大学における入学難易度を用いて、入学難易度が高い大学ほど学生の職業アスピレーションが高く、それによって学習に対するモチベーションも高いという結果が提示されている¹¹。

アスティンが大学の環境という内部効果に着目したことに対し、マイヤーのチャーター効果は大学というブランド力、機関名からもたらされる外部効果に焦点をあてているといえるだろう¹²。日本の学生研究は、大学の大量化が顕在化するまでの1990年代後半から現在にいたるまではこのチャーター効果の系譜を継承してきたことが特徴であり、スクリーニング理論などもこの系譜を引くものとみなすことができる。

近年では、大学生の学生文化に焦点を当てた研究の蓄積が心理学の系統あるいは社会学の系統から積み上げられている。現代社会と其中で生きる大学生の自己の概念をキーワードのその心理に焦点を当てた溝上の心理学的研究や、現代大学生のアルバイト、サークル、学習を学生文化として捉えた武内等の社会学的研究がその代表的な研究である¹³。

最近では大学の内部効果と学生の卒業時に身につける能力・スキルに焦点を当てたコンピテンシーの研究へと拡大している。吉本圭一(2004)、「高等教育コンピテンシー形成に関する日欧比較研究」、平成14・15年研究成果報告書。小方直幸(2001)、「コンピテンシーは大学教育を変えるか」、『大学・知識・市場』高等教育研究 第4集 玉川大学出版部が代表的なコンピテンシー研究であるが、労働市場との関係性に焦点をあてている。

我々研究グループは、チャーター効果やスクリーニング理論の持つ意義を十分に把握しつつ、以前と比べてより学生が変容してきたという現実と高等教育機関がより教育を充実するようになってきているという環境変化のなかで、大学という環境に再度注目した大学生の教育評価研究を推進する点に差異があるとなしたい。

本研究において、研究グループが開発してきた調査は日本版大学生調査(JCSS)であるが、そのベースとなった調査は大学生調査(CSS)である。アメリカでは大学生調査をひとつの例として多くのアセスメント(調査)が開発されてきている。その種類は多岐にわたっている。アスティンのI-E-Oモデルに代表されるようなカレッジ・インパクト研究の知見からアセスメントの開発へとつながったものや学力測定の延長線上にあるアセスメントなど多様である。そこで、次節では、アメリカで活用されているアセスメントの種類を分類してみよう。

3. アメリカにおけるアセスメントの意味と分類

アメリカにおいて、アセスメントは様々な機会に色々な場所で実践されている。アセスメントは一般的には学生、教職員、および高等教育機関自体の情報を収集するために実施されるが、本来その目的は高等教育機関の機能やそこにかかわっている学生、教職員などアクターの活動の改善などの客観的資料として使用されることにある。具体的には高等教

育機関が社会からの要請に応えること、また、社会へその活動を説明するために使用すること、学生の学習意欲や成果を向上させること、教職員の研究、教育、およびサービスの向上などである。このように高等教育機関にかかわるアセスメントは幅広い意味で使用されているが、とりわけ今日では学生がアセスメントを受ける機会が多いことから、ここでは学生を対象とするアセスメントの意味と目的について概観してみることにしたい。

学生を対象としたアセスメントを開発してきた第一人者であるアスティンによると、教育・教授（ティーチング）と学習（ラーニング）との相互関係の過程や結果を測ることがアセスメントであり、学生の教育上での発達を向上させることがアセスメントの目的であるとしている¹⁴。したがって、大学機関や教員へのアセスメントも実際には学生への教育の効果を向上させることや教育改善に結びついているとしている。アスティンはアセスメントを実施する理由について、アセスメントの直接的目標とその目標の基礎となる価値という2段階があると論じている。具体的には、直接的目標として学生を入試によって選抜するという行為であり、その背後にある価値として、機関の卓越性を高めるということが挙げられる。その価値に着目すると、通常一般的に長らく使用されてきたアセスメントとしては、大学や大学院の入試（Admission）が代表的であるが、この意味は機関の卓越性を支援する資源としてあるいは説明するためであると考えられる。すなわち、優秀な学生を多く抱えることは人的資源としての価値があるだけでなく、機関の評判を向上させるという価値がある。しかし、この入口のアセスメントのみでは入学時点での学生のタレント（能力や才能）を測ることは可能であるが、その後の学習上や精神面での成長を測ることは不可能である。学生が卒業時に学習上やその他の面でどれだけ成長したかが測ることができたならば、高等教育機関の価値は人材育成に効果があった評価されて、上がるとみなされる。理想的にはそうあるべきだが、実際には学習の直接的効果の測定は容易なことではない。しかし、学生の能力や才能が向上したかどうかの直接的な測定としては学習者に焦点をあて、その成果を測定することであり、間接的な測定としては教育者側に焦点を当てることは可能である。長い間にわたって、学生の学習成果を測定する直接的アセスメントとしては、ガイダンスやプレースメント・テストに重点がおかれてきた。しかし、現在ではアセスメントにも様々な種類が存在し、測定する中身も多様である。

では一体アセスメントにはどのようなものがあり、どのような種類が一般的に大学で使用されているのだろうか。ここでアセスメントを分類してみたい。大きく分類するとアセスメントは二分類できる。第一の分類に属するアセスメントは、プレースメント・テストという形式で実施され、その結果にもとづいて大学の正規の教育課程での授業を履修する上で困難性のある学生を特定し、このような学生のための補習授業や能力別授業を編成するために用いられる。あるいは学生自らが自分の学習上の弱点を自己認識するための、自己診断ツールとして利用されている場合もある¹⁵。プレースメント・テストとしては、入

学要件として新入生が大学への応募時に必ず提出する SAT(進学適性テスト)や ACT(全米大学入試テスト)など¹⁶があるが、入学後に補習教育授業や能力別授業編成を目的として実施されるプレースメント・テストとしては、各々大学が作成した基礎スキルテストや市販の基礎スキルテストなどの標準テストやテキサス州が開発した「テキサス・アカデミックスキル・プログラム(TASP)」やフロリダ州が開発した「アカデミックスキル・テスト(CLAST)」などの標準テストがある。これらの州では州政府によって、大学進学希望学生への基礎スキルテストの受験が義務付けられていることから州による標準基礎スキルテストの開発がされたわけだが、この背景には高校卒業時の出口保障という側面とも関係しており、ある意味では中等教育のアカウントビリティ問題とも深く関わっている。

自己診断用あるいはカウンセラーなどが利用するツールとしてのテストには、「読解・作文・数学」という「基礎スキル」だけでなく、学習行動や価値観などをベースとした学習意欲、動機付け、学習態度や習慣などの情緒的な要因を重視するアセスメントが多く利用されており、近年のアセスメントはどちらかといえばこうした学習意欲、動機付け、学習態度や習慣などを図り、次にどのように育成していくかの基礎資料とするアセスメントが主流となる傾向がある。この種のアセスメントは第二の分類に属するアセスメントとなる。

大学での学習を円滑にすすめていくために必要とされるスキルやその他の資質を測定した上で、大学での学習の効果をあげるための支援をおこなうための資料として活用されている第二の分類に属するアセスメントの種類とその意味について検討する。

ベアフットは大学の一年次で主におこなわれるアセスメントを以下のように分類している¹⁷。

1. 履修前基本データ取得用アセスメント

これらのアセスメントは入学要件として求められている SAT や ACT 等の適性テストと同様に高校時代に実施される場合、あるいは新入生のオリエンテーション期間中に実施されるが、SAT や ACT とは異なり、学生の大学での期待や目標など入学前の行動や経験を把握し、大学生活の基本データを収集する目的で実施される。

- ・ CSXQ - College Student Expectations Questionnaire(開発者 Kuh , Indiana)
特徴 大学での学生の経験についての項目から構成されている。学生の自己評価、カリキュラムについての評価等も包含している。
- ・ College Student Inventory Form A & Form B (開発者 Noel-Levitz 社)
特徴 学生の学習準備、態度、高校時代の学習などの背景についての質問項目から構成された大学生活への円滑の移行を予測する基礎調査として幅広く使用されている。
- ・ CIRP Student Information Form (The Freshman Survey)(開発者 Astin , UCLA)

特徴 新入生用に 1966 年から開発された調査であり，本調査への参加大学の新入生の調査への参加率は 85%と高い。

- ・ Entering Student Survey(開発者 ACT)

- ・ Student Needs Assessment Questionnaire (開発者 ACT)

特徴 人生の目標 成長と発達問題 高校での学習ニーズ等の質問項目より構成されている。

- ・ Survey of Current Activities and Plans (開発者 ACT)

特徴 入学した大学の印象，大学選択の理由，教育目標等の質問項目より構成されている。

- ・ Survey of Postsecondary Plans (開発者 ACT)

高校生の大学や就職に関する意識，選択した大学の印象，大学選択の理由等の質問項目より構成されている。

2．一年次終了時点でのアセスメント

- ・ College Student Report - National Survey of Student Engagement(NSSE)
(開発者 Kuh, Indiana University)

特徴 特に一年次を終了する学生を対象に開発されたアセスメント CSEQ と類似した特徴を持つ。

- ・ Community College Survey of Student Engagement (CC SSE) (開発者
(McClenney, University of Texas-Austin)

特徴 コミュニティ・カレッジでの学習中心の尺度からなる質問項目から構成されている。

コミュニティ・カレッジやテクニカル・カレッジでの教育実践の全国基準となるような基準を設定するために作成された。学生の診断用ツールとしても使用できる。

- ・ YFCY-Your First College Year (開発者 Sax, UCLA)

特徴 アスティンが開発した一年生入学時に受けるアセスメントである CIRP と比較して，一年間でどのような成長，変化があったかを見るためのアセスメントである。

3．学生の行動，態度，学習スキル，満足度や経験に関するアセスメント

学生の学習時間や，友人，大学教員との接触度，知識や自信についての自己評価，時間管理，ノートのとり方などの学習スキル，大学への満足度，生活管理スキルなどの項目から構成されており，どの大学でも使用し，学生文化把握のために使用されている一般的なアセスメントである。1 および 2 と重複するアセスメントもある。

- ・ College Outcomes Survey (開発者 ACT)

特徴 学生の個人的成長，社会的成長，認知的達成度，基本スキルや知識の習得度，学習習慣，大学への満足度等の項目から成るアセスメントである。

- ・ CSS College Student Survey(開発者 Astin , UCLA)

特徴 4年生用または一般的な学生のアセスメントとして使用され，データは同じくアスティンが開発した一年生用の CIRP と比較可能となっている。

- ・ CSEQ-College Student Experiences Questionnaire(開発者 Kuh , Indiana University)

特徴 大学での学生の経験についてのアセスメント 大学で習得した学習スキルについての自己評価項目から構成されている。

- ・ College Student Needs Assessment Survey (開発者 ACT)

特徴 大学での個人的目標，生涯目標，キャリア目標，教育目標，生活スキル等の項目から成るアセスメントである。

- ・ CCSEQ-Community College Student Experiences Questionnaire (開発者 Murrell , Memphis University)

特徴 CSEQ をコミュニティ・カレッジ学生用に修正したアセスメント。学生の努力の質を測定する目的で開発された。

- ・ Faces of the Future (開発者 ACT/American Association of Community Colleges)

特徴 コミュニティ・カレッジやテクニカル・カレッジの学生用に作成され，当該大学選択の理由，大学への満足度，キャンパスへの印象，大学在学中の目標などの質問項目から構成されている。

- ・ Institutional Priorities Survey(開発者 Noel-Levitz)

特徴 満足度と重要度の比較項目から成るアセスメントである。

- ・ LASSI-Learning and Study Strategies Inventory (開発者 Weinstein)

特徴 学生の学習習慣についての項目から成り立っているアセスメントであり，カウンセラーが使用する診断ツールあるいは自己診断ツール，補習授業での効果を測定する目的でもしくは大学のリテンション管理プログラムの一環として幅広く使用されている。

- ・ PEEK - Perceptions , Expectations , Emotions & Knowledge about College(開発者 Weinstein)

特徴 補習教育プログラム受講者を選定するための診断ツールとして使用されている。

- ・ Program Self-Assessment Service(開発者 ETS)

特徴 授業環境についての学生の意識調査，学生の行動や経験，学外での活動，卒業後のプラン等についての質問項目から成る。

- ・ RSVP-Student Retention Survey (開発者 ACT)

特徴 学生の目標，経済状況，大学への印象，個人的問題，大学への満足度，学生生活状況，教員への満足度，寮生活，設備，施設への満足度，学生サービスや教務サービスへの満足度等の質問項目から構成されており学生のリテンション率を把握するためのアセスメントである。

- ・ Student Satisfaction Inventory(開発者 Noel-Levitz)

特徴 大学のサービス全般に対する満足度についてのアセスメントとして開発された。

- ・ Student Opinion Survey(開発者 ACT)

特徴 大学のサービス全般に対する満足度と実際の利用度についてのアセスメント
また学生の教務，入学要件，規則，施設，登録，他の大学での経験等についての意見を自由回答から把握するように設計されている。

- ・ 授業評価

特徴 各々大学が開発した学習効果と授業への満足度を測るアセスメントとして一般的に使用されている。

4. 特殊なサービスやプログラムを対象としたアセスメント

このタイプのアセスメントは教務上の登録相談，寮生活，一年次セミナーなどの特定のプログラムやサービスを対象に策定されたアセスメントである。

- ・ Financial Aid Services(開発者 ACT)

特徴 奨学金サービスに特化した満足度等のアセスメントである。

- ・ First Year Initiative(FYI) Benchmarking (開発者 EBI & Policy Center on the First Year of College)

特徴 ファーストイヤー・セミナーに関する一年次教育に焦点化したアセスメント
ベンチマーキング調査としても利用されている。

- ・ LCEQ36 - Learning Communities Experience Questionnaire

特徴 ラーニング・コミュニティや一年次セミナー用のアセスメント 学生同士の協力度，学生と教員の協力度，学習へのかかわり度，共同学習の度合い等に関する質問項目から成り立っている。

- ・ Survey of Academic Advising(開発者 ACT)

特徴 履修登録など教務サービスに対しての評価項目から成るアセスメントである。

5. 特殊な学生集団を対象としたアセスメント

非伝統的な学生集団など特殊な学生を対象として作成されたアセスメント

- ・ Adult Learner Needs Assessment Survey(開発者 ACT)

特徴 成人学生の入学時に実施されるアセスメントで、仕事、家族の支援、大学での学費についての実態把握および生活スキル開発、キャリア開発、教育計画、旧友との付き合い等についての実態把握の目的で実施される。

- ・ Adult Student Priorities Survey(開発者 Noel-Levitz)

特徴 25 才以上の成人学生を対象に満足度と重要度についての意識調査の一種として使用されている。

- ・ Fraternity Survey・Sorority Survey(開発者 EBI)

特徴 寮生活についての実態、寮での諸サービスについての満足度やニーズ等についての質問項目から成る。

- ・ Withdrawing/Nonreturning Student Survey(開発者 Short &Long Forms)

特徴 大学を辞める理由、個人的および学習上の理由、経済的理由等から構成された項目で大学を去る原因を把握するためのアセスメントとして開発された。

6. 学力や知識に関するプレースメント・テスト

学力試験や学習スキルを測定するために意図されて作成されたアセスメントである。このタイプのアセスメントは、意識調査や満足度調査とは異なり正答が用意されており、かつ学生の能力を判断するツールとして使用される。これらのプレースメント・テストが実施される趣旨としては、入学時の学生の学力を測定し大学のどの授業を受講するのが適当であるかを診断するため、2・3 年時点で実施し、学生の学習上の成長度合いを評価するため、あるいは専門課程へ進学する条件をクリアーしているかを評価するため、4 年時点で実施される場合には、大学での学習効果があったかどうかを学習上での成長度から把握するため。標準的なプレースメント・テストに加えて、しばしば学生の自己評価による学習スキルの向上度を測定するアセスメントもある。

- ・ Academic Profile (開発者 ETS)

特徴 読解、作文、数学および批判的思考 (Critical Thinking) を測定する問題および人文、社会科学、自然科学の学問領域からの問題で構成されているテストで終了までの時間は 2 時間 30 分かかる。

- ・ Accuplacer & Companion (開発者 College Board)

特徴 読解、文章技能、初級代数、数学部門の問題から成り立っているプレースメント・テストで、補習授業受講決定やガイダンス目的で実施される。

- ・ ASSET(開発者 ACT)

特徴 コミュニティ・カレッジやテクニカル・カレッジ用に開発された読解、作文、

数学分野の問題から成るプレースメント・テストで補習授業受講決定やガイダンス目的で実施される。

- ・ College BASE(開発者 Missouri)

特徴 一般教育やコア・カリキュラムの効果を測定する目的で実施されるアセスメントである。このアセスメントはミズーリ州全体で実施され、パフォーマンス・ファンディングと密接に関連している。また3年生への進級テストや卒業試験としても使用されていることも多い。

- ・ Collegiate ASS/ESS(開発者 ACT)

特徴 読解，作文，科学，数学，批判的思考，エッセイ作文などの領域別に作成されたプレースメント・テストである。

- ・ COMPASS/ESL(開発者 ACT)

特徴 英語を母国語としない学生用に作成された読解力，作文，数学から成るプレースメント・テストである。

- ・ Tasks in Critical Thinking(開発者 ETS)

特徴 人文，社会科学，自然科学領域から構成された問題から批判的思考を測定する目的で開発されたプレースメント・テストである。

前述した学習能力を測定するプレースメント・テストをはじめとする様々なアセスメントに加えて，大学進学の際に要件として課せられたSATやACTなどの標準テスト結果だけでなく，大学にはSATやACTを受けて入学した学生のプロフィールがテストサービス会社から送付されている。それらの情報は学生のテストの成績，学生の家庭背景，学生の特徴などの基本データを包含しており，また過去に同様の点数を取った学生の歩留まり率，大学でのリテンション率などの予測などもテスト会社はデータとしてまとめ，大学側に情報として送付している。大学側はこの情報をもとに入学してくる学生のおおよその基本的データを把握している。

以上のように二分類されたアセスメントはさらに6種類に細分化することができる。次章では学生の行動，態度，学習スキル，満足度や経験に関するアセスメントに分類される大学生調査(CSS)日本版をもとに実施した日本版大学生調査結果を示していくことにしたい。

注

¹ Pascarella, E.T., Terenzini, P.T.(2005). *How College Affects Students*, San Francisco, Calif: Jossey-Bass. p.18.

² Chickering, A. (1969). *Education and Identity*, San Francisco, Calif: Jossey-Bass.

³ Chickering, A., & Reisser, L. (1993). *Education and Identity* (2nd ed.), San Francisco, Calif: Jossey-Bass.

-
- ⁴ Pascarella, E.T., Terenzini, P.T.(2005). *How College Affects Students*, San Francisco, Calif: Jossey-Bass. pp.33-50.
- ⁵ Ibid. pp.50-52.
- ⁶ Astin, A.W.(1993). *Assessment for Excellence: The Philosophy and Practice of Assessment and Evaluation in Higher Education*, Phenix, Arizona: ORYX Press. 18 頁の図を参照し，筆者が訳した。
- ⁷ Ibid.45 頁の表を参照し，筆者が訳した。
- ⁸ Pascarella, E.T., Terenzini, P.T.(2005). *How College Affects Students*, San Francisco, Calif: Jossey-Bass. p.53.
- ⁹ Ibid. pp.54 - 56.
- ¹⁰ Ibid. pp.56 - 60.
- ¹¹ 丸山文裕，(1980)，「大学生の職業アスピレーションの形成過程：チャーター理論による大学の効果分析」，『名古屋大学教育学部紀要 教育学科』，第 27 巻，(1981)，「大学生の就職企業選択に関する一考察」，『教育社会学研究』，第 36 集を参考にした。
- ¹² Meyer, J.W. (1977). "The Effects of Education as an Institution", *American Journal of Sociology*, Vol. 83 (1), pp. 55-77.
- ¹³ 溝上慎一（編），(2001)，『大学生の自己と生き方 - 大学生固有の意味世界に迫る大学生の心理学 - 』，ナカニシヤ出版。溝上慎一，(2002)，『大学生論 - 戦後の大学生論の系譜をふまえて - 』，ナカニシヤ出版。武内清，(1999)，「学生文化の規定要因に関する分析」，『「学生文化の実態，機能に関する研究」研究成果報告書』。武内清（編），(2003)，『キャンパスライフの今』，玉川大学出版部。武内清（編），(2005)，『大学とキャンパスライフ』，上智大学出版等を参照した。
- ¹⁴ Astin, A.W. (1993). *Assessment for Excellence:The Philosophy and Practice of Assessment and Evaluation in Higher Education*. Phenix:Arizona, ORYX Press.
- ¹⁵ 権瞳 「アメリカ合衆国の大学における学習スキルテストの効用と学習支援」，『日本の大学におけるスタディスキル・テストの開発に関する研究』，平成 12~13 年度科学研究費補助金 基盤研究 (C) (2) 研究成果報告書 2002 年 3 月，研究代表者 佐藤広志 16~30 頁。
- ¹⁶ 留学生については，TOEFL などプレースメント・テストとして扱われている。
- ¹⁷ 2001 年度世界一年次教育学会において開催されたワークショップ，First-Year Assessment::Finding the Evidence, Improving the Outcomes に参加し，Betsy O. Barefoot 氏のレクチャー資料を筆者が翻訳しまとめた。